『就実教育実践研究』第13巻　抜刷
就実教育実践研究センター　2020年３月31日　発行

初等教育ゼミナールⅠ・Ⅱにおける思考力育成の取り組み

An approach for nurturing the ability to think in elementary education seminar Ⅰ and Ⅱ

渡　邊　言　美

初等教育ゼミナールⅠ・Ⅱにおける思考力育成の取り組み

渡邊言美

An approach for nurturing the ability to think in elementary education seminar Ⅰ and Ⅱ

Kotomi WATANABE（Department of Elementary Education）

抄録

筆者実施の３年次初等教育ゼミナールⅠ・Ⅱにおける思考力育成の取り組みについて論じることを目的とする。まず大学ゼミナールにおける思考力育成の意義について先行研究・実践を整理する。次にこれまでの本ゼミ実践を振り返り、今後の課題を述べる。

キーワード

批判的思考[1]、論理的思考、ゼミナール、卒業研究

はじめに

筆者による当該ゼミナールは初等教育学科３年次前期後期に実施している。2011年度の本学赴任以来、ゼミ希望者のいなかった2015年度生を除く毎年実施して９年目を迎え、在学３年目（ゼミ１年目）の思考力育成の重要性を年々強く感じるようになっている。言うまでも無く３、４年次ゼミナールは本来的には卒業研究の構想・執筆・完成を目指すものである。しかしその前提となる思考力が十分に備わっていなければ十分な研究活動は期待できない。そのためにも３年次の取り組みが重要であると考える。

Ⅰ　大学生の思考力育成に関する研究

近年書店でも、論路的思考や批判的思考等、思考力育成に関する文献が多く見られるようになった。2017年度改訂の新学習指導要領のめざす方向においても、学校教育で求められる資質・能力の１つに「知っていること・できることをどう使うか（思考力・判断力・表現力等）」があげられている[2]。

> 問題を発見し、その問題を定義し解決の方向性を決定し、解決方法を探して計画を立て、結果を予測しながら実行し、プロセスを振り返って次の問題発見・解決につなげていくこと（問題発見・解決）や、情報を他者と共有しながら、対話や議論を通じて互いの多

様な考え方の共通点や相違点を理解し、相手の考えに共感したり多様な考えを統合したりして、協力しながら問題を解決していくこと（協働的問題解決）のために必要な思考力・判断力・表現力等である。

この指摘は、そのまま大学生の卒業研究遂行能力の一端に当てはまると考える。多くの文献で批判的思考力、論理的思考力の育成の重要性が唱えられており[3]、大学教育での導入についての研究も進められつつある[4]。以下、学術論文を４本紹介する。

・楠見孝・田中優子・平山るみ（2012）「批判的思考力を育成する大学初年次教育の実践と評価」『認知科学』19巻１号

大学初年次教育での批判的思考力育成の意義について論じ、初年次教育での実際の実践プログラムを開発し、授業実践と評価を行った。うち研究１では学生の討論参加態度などに向上が見られること、研究２では、取り入れられた授業方法への肯定的評価が授業満足度や事後の批判的思考得点に関わることが示唆された。

・菊島正浩・寺本妙子・柴原宜幸（2018）「大学生における批判的思考力と態度の育成を目的とした教育プログラムの実践と評価」『日本教育工学会論文誌』41（4）

大学１、２年次の合同ゼミナール授業で、批判的思考力と批判的思考の態度の育成を目的とする教育プログラムの実践・評価を試みた。参加者には本プログラムの批判的思考力育成効果を示唆する変化が認められ、批判的思考に関する態度の育成にも一定の効果が認められたが、課題も見つかったことが示された。

・鳥越淳一・佐久間祐子・平久江薫（2017）「批判的思考の学修における否定的反応の生成プロセスとそれに対する介入モデルの形成－大学における―批判的思考育成への実践的応用に向けて－」『開智国際大学紀要』第16号

１、２年ゼミ生で批判的思考法を学修した学生を対象にインタビュー調査を行い、アクティブラーニングの要素が取り入れられた授業の中で、日本の大学生がどのように批判的思考の学修に対してネガティブな印象を展開させるのか、またそれに対し教員がどのように介入できるかに焦点を当てた学修プロセスのモデルを生成し、批判的思考のより良い教育実践への還元を目指した。課題として、対象学生の集団特性に、精神健康度に関するハイリスクの判定が４割程度存在する事が判明した。アクティブラーニングの導入によって社会化された授業は、自己の感情を適切に取り扱えない学生にとって、新しい思考法を既存の自己に統合しにくくする可能性を孕んでいることが明らかにされた。

・向居暁（2012）「大学のゼミナール活動における批判的思考の育成の試み」『日本教育工学会論文誌』36

大学のゼミナール活動（総合演習ⅠⅡ、演習ⅠⅡ）における批判的思考のスキルの学習を目的とした授業により、批判的思考態度、批判的思考能力育成を試みた結果、

批判的的思考育成群（筆者のゼミ学生）は、統制群と比較して批判的思考態度の「探究心」特典に上昇が認められた。批判的思考能力に対しては、授業の効果はみられなかったものの、育成群に関しては、授業前・後の批判邸思考態度の「探究心」得点の変化と批判的思考能力の全体得点変化の関連性に有意傾向が見られたという。

向居の論文ではこの批判的思考力育成授業の全容が明らかにされているわけではないが、講義と振り返り作業、「飛行機は自動車より安全か」という問題を扱ったという。実際の大学教育の内容の一端を知ることができたこと、また批判的思考育成群に有意傾向が見られたことは、大学授業による批判的思考能力の育成に一定の効果があることを示唆するものとなっている。

以上紹介した論文４編は、いずれも大学前半（１、２年次）期における取り組みではあるが、３、４年次ゼミナールでの実践への示唆に富む内容となっている。

Ⅱ　大学ゼミナールでの批判的思考力育成に関する文献

ここで紹介するのは、３、４年次に行う卒業研究を主としたゼミナールにおいての実践報告である。

・宇多智之（2017）「「PDM（Project Design Matrix）」ゼミにみるゼミ生の学び ～論理的思考の習得～」 駒澤大学グローバル・メディア・スタディーズ学部『ジャーナル・オブ・グローバル・メディア・スタディーズ』20。

PDMを用いたプロジェクトの策定・計画立案手法を解説するとともに、本手法をゼミで実践的に学ぶことにより３年生前期のゼミ生にどのような変化がもたらされるのか解明する事を目的とする。論理的思考を身につけるには思考そのものを学ぶのではなく実践が一番である。実社会の課題を解決するためのプロジェクトを立案するプロセスで「必要十分条件」「原因－結果」、「手段－目的」といった概念を具体的なものとして学ぶことができる。少なくとも議論における論理性を意識するようになったこと、なぜそのような結論になるのか、その論点を立証するためには何が必要なのか、PDMゼミ以降しばしばこのような議論を自信を持って行う姿が見られた。ゼミ課題の素材は異なっても考え方の基本となる部分は共通していると言える、と述べている。

大学のゼミに導入した活動の効果を検証するものとなっている。宇多の論文での取り組みはJICAの国際開発援助プログラム開発を主体とするものであるが、教員、保育者を目指す学生が企画運営する取り組みにも応用できる観点が多いと考えられる。

Ⅲ　本ゼミナール Ⅰ・Ⅱ の実践報告

本ゼミナールの目標・研究テーマは、「教育」「学校」「子ども」「子育て」にかかわる諸事象について、分析・検討することを通して、教育・子育て・学校全般についての多面的な思考能力を養うとともに、よりよい教育実践のための基礎能力を習得することを目的とする。学生に提示するキーワードは、「教育学・教育史・教育思想・教育制度・論理的思考・

批判的思考」としている。以下１－３の３点について概要を報告する。

１：テキスト
２：講義内容、成果、特徴
３：学生の評価・受け止め

１：テキスト

１は主として前期、２は主として後期、３は休暇用課題として用いている。

・１　山田剛史・林創（2011）『大学生のためのリサーチ・リテラシー入門―研究のための８つの力―』ミネルヴァ書房

内容的には１年次実施の「初年次教育Ⅰ・Ⅱ」の内容も含み、これまでの大学２年間での学びを振り返る意味もある。文献探索や文献の整理、レポートの書き方、基本的な内容の演習を行うことができる。

・２　広田照幸・伊藤茂樹（2010）『教育問題はなぜまちがって語られるのか？―「わかったつもり」からの脱却―』日本図書センター

卒業論文のテーマを模索する上で非常に役立つ一冊であると考えている。「教育問題」は「問題」とされることによって発生する、という主張は、学生にとっては非常に新鮮な主張であり、おそらく「偉い人」たちの主張を鵜呑みにしがちであった思考を覆すことができる一冊である。

・３　広田照幸（2009）『ヒューマニティーズ　教育学』岩波書店

近代教育学の成立過程、教育学について議論すること、学ぶことの意義について明快に論じている。学生には是非読んでもらいたいため、毎年課題としている。難解であるとの感想は毎回見られるが、ぜひ通読し、内容理解のために読ませたい。

２：講義概要・成果・特徴

・講義概要

１年間全体の概要は以下の通りである。

①文献検索の方法や図書館での実習など、卒業論文にむけての基本的事項のガイダンスを行う。論理的思考・批判的思考の訓練のために、短文の読解や作文を行う。文献としてはテキスト以外に、井下千井子（2019）『思考を鍛えるレポート・論文作成法』や、佐藤望編著（2006）『アカデミック・スキルズ－大学生のための知的技法入門－』、狩野光伸（2015）『論理的な考え方伝え方―根拠に基づく正しい議論のために―』等をよく参考にする。（以上いずれも慶應義塾大学出版会）

②教育学に関する文献・テキスト１、２について、学生が各自要約・分析・批判点を発表し、全体で討論を行う。筆者の主張の背景や隠された前提、欠けている視点等に気付かせたい。

③卒業論文テーマについて各自興味のある論文について要約コメント発表・討議を行う。

基本的には文献研究である。本ゼミの特徴が文献研究であることは、他ゼミとの比較をなす上でも重要であると考えている。2019年度は３年生13名の教員がゼミナール担当であるが、幼稚園、小学校、特別支援学校等での教員経験の長い教員、大学での研究を中心としてきた教員が双方そろっており、卒業論文の研究手法も対象領域も多岐にわたっており、学生は様々な要素を考慮して選択することができるのが本学科の強みである。調査統計データを分析したり、小学校等での授業研究を行ったり、施設や学校園での見学やデータ収集を行ったり、多彩な実践が見られる。そうした中で本ゼミナールの「強み」を生かすとすれば、中等課程（中学高校、養護、特別支援）担当教員であること、教育史研究はいわばすべての事象に関して議論できる分野であること、があげられる[5]。産育から保育、幼児教育から高等教育までカバーできる。むろん学生の主体的取り組みが前提となることは言うまでもない。

まずゼミナールⅠ（前期）では、主として以下の内容で行っている。

（１）テキスト１　の要約コメント作業

Ａ４サイズ１枚もしくは２枚にテキスト指定部分の要約と自分のコメントを記入する。

・要約は図作成を推奨する。１枚でのレイアウト重視。

・必ず自身の考えを記入する。筆者の考えや結論に同意するか否か、同意できない場合どのように考えるかを示す。

（２）卒業研究準備

４月に図書館が実施してくれる「図書館ガイダンス」に予約し、文献検索方法やデータベースの活用方法、研究文献の調査方法をご教示いただく。「聞蔵」「sandex」等の新聞記事データベース活用法も教えていただける。例年、初等教育学科の学生の関心に即した内容を事例として提示いただくなど、非常に充実した資料を作成・配布していただいており、ありがたく思っている。

（３）要約のために読む方法

１　アブストラクト、要旨、摘要　を読む

２　章、節ごとの中心的な主張に線を引いたり付箋を貼る

３　著者の主張に同意できる部分に○、できない部分に×、理解できない部分に？をつける

４　自分で調べるべき部分に印をつける

（４）テキストクリティーク　（論文要約レジュメには必ず記載すること）

１　論文の　著者名・題目・刊行年・出所（紀要名、紀要発行元）

２　著者の立場（この議論に賛成か反対か、この政策を推進する立場か否か等）、所属、専門領域

３　問いは何か

4　答えは何か（「結論」）
5　この論文の意義（明らかになったこと、よい点）はなにか
6　この論文の悪い点（疑問、批判、不足　等）はなにか
7　このテーマに関して自分が調べるべきことは何か
（5）夏課題　9月発表
1　自分が卒業研究で扱いたいテーマを提示。
2　そのテーマを扱いたい理由　できるだけ多く　（経験、報道、授業内容、読んだ本etc）
3　そのテーマで明らかにできそうな内容　いくつでも
4　関連する先行研究　少なくとも3点（論文、著書）
5　その先行研究の概要とコメント

ゼミナールⅡ（後期）では、以下の取り組みを行っている。
1　テキスト2の読解、要約、批評、討論
2　自分の希望テーマ関連先行研究の読解、要約、批評　プレゼン
3　4年生による卒業研究中間発表参加、質問コメント。おそらく「何を質問していいかわからない」という学生も存在すると思われるが、1年後の自分の姿を想定するよい機会になると考えている。また発表者の4年生にとっても、自分の卒業研究進捗状況を把握し、プレゼン技術を磨く場ともなる。
4　4年生卒業研究発表会でのスタッフ、質疑参加

・成果
本ゼミナールでの最近の卒業研究題目例をいくつか提示する。
小学校系
・「小学校におけるユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業の改善 ― ＭＩＭを手がかりに ―」
・「現職の教師に求められる資質・能力に関する研究 ― 日本とアメリカを中心に ―」
・「小学校段階における自己調整学習能力育成に関する研究」
・「TALIS調査の批判的分析からみた教員指導環境の改善策についての提案」
幼保系
・「日本の保幼小連携 ― デンマークの教育制度との比較 ―」
・「幼児教育における自然体験学習の意義 ― 森のようちえんを中心に ―」
・「モンテッソーリ教育法の意義と活用法への提言」
4年次に自身の研究関心に基づき卒業研究題目を決定し、調査研究を経て完成させる。これまでの卒業生は、多くの学生が「やりがいがあった」「がんばった」「調べた結果が現在の職業生活に直接つながるわけではないが、いい経験になった」といった好意的な感想をあげてくれている。ただしその成果を可視化する指標がなく、抽象的にしか論ずること

ができないのが実情である。

・特色

①学外授業の積極的実施　2019年実施分についてあげると、

・岡山県立図書館（岡山市）（６月）

全国開催の小学校検定教科書展示を見学した。2020年度から使用予定の新学習指導要領準拠教科書全科を初めて目にすることができた。現行教科書が閉架式となっており、時間切れで直接比較ができなかったことが悔やまれる。

・トンボユニフォームミュージアム（玉野市）（８月）

株式会社トンボ本社･工場･博物館にお邪魔し、社員のご説明を受けながらユニフォームミュージアムや制服工場の見学をさせていただいた。古代から現代までの学校制服の歴史を観覧し、その変化や背景を学ぶことができた。特に特別支援学校やLGBTの児童生徒向けの制服の工夫については、筆者も学生もはじめて知ることが多かった。

・ふくやま草戸千軒ミュージアム（福山市）（３月）

「早春の展示 小学校の教科書のあゆみ～教科書の歴史に見る近現代の姿～」鑑賞。近代日本小学校教科書の展示。戦前期の特に、「緑表紙」と呼ばれる初の小学１年生用算数教科書の展示では、画家や印刷技術の解説等、非常に工夫が凝らされていた。戦後最初の社会科教科書「まさおのたび」の解説によって戦後の生活に即した編集の工夫が理解できた。また点字教科書の移り変わりも展示されており、日頃目にすることの少ない特別支援学校教科書の変遷の特質も理解することができた。比較的小学校・特別支援学校教職課程履修者の多い本ゼミ生にとって非常に発見の多い展示となっていた。

過去には、日本玩具博物館（姫路市）、桃太郎からくり博物館（倉敷市）、遷喬小学校給食・学生服・唱歌体験（真庭市）、京都市学校教育博物館等（京都市）、これまで多地域に足を延ばしている。基本的に筆者の筆者の専門が教育史であることから、場所の選択は筆者自身の関心が反映された提案によって行われている。これまで学生からの具体的提案がなされていない実情があるため、今後は学生からの推薦をもとに選定することを考えている。

無論直接思考力育成につながる取り組みではないが、様々な思考の源となるトピックを、インターネットや平常の大学授業外でも見つけてほしいと考えている。

②ゼミの進め方

本ゼミでは、「自分の意見を言うこと」「根拠を示すこと」「他者の考えを尊重しながら意思表示する」ことを約束する。基本的に「他者と異なる意見を出すこと」を第一の目標とする。

③教材

・新井紀子（2018）『AI vs教科書が読めない子どもたち』東洋経済新報社（2018年度より使用）

キューバ出身の野球選手の比率を問う問題、Alexの愛称を問う問題等を提示し、なぜ生徒が間違えるのかを考えさせる。

・新聞の記事批評。

両論併記の記事を提示し、どちらの主張を支持するか、またその根拠を示す。また論者の立場から、議論の偏りや限界についても考えさせる。（例、論者の主張の根拠となる指導学生の学力がそもそも入学段階で高いので一般化できない、等）

・いじめと学級集団の関連についての新聞記事批評。

掲載されたグラフの内容が、記事での主張内容に即していないことに気づかせる。

・論文批評。

実際に論文１本を通読し、学術論文として何が足りないか気づかせる。

（例：研究目的と結論に矛盾がある、主張の裏付けとなる文献が二次文献しかない、主張の根拠が主観に基づく　等）

・春期休暇の課題

テキスト３の要約とコメント。これまで巻末参考図書１冊を必ず入手してコメントを書く課題も課していたが、文献の刊行年次が少々古くなってしまったことを受けて廃止する予定である。

一読したのみでは、難解であるという感想がよく見られる。しかし、多くの教育問題に関する視点が提示されており、近代教育学説史を把握する上で有用な書籍である。

３：学生の評価、受け止め

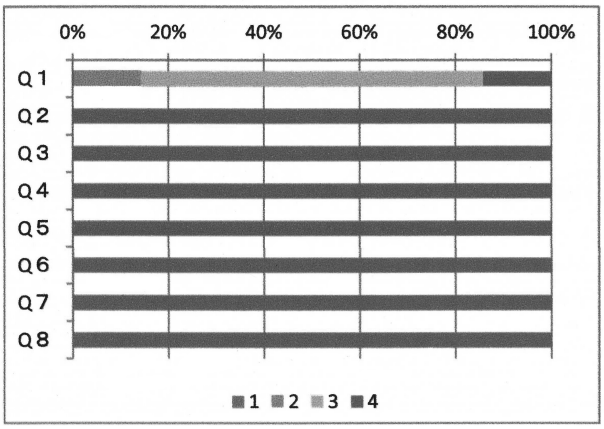
今年度の学生の評価である。自由記述欄は未記入である。これについては意見がないわけではなく、筆跡からの個人特定を恐れ、自由記述欄への記入を躊躇する可能性があることを考慮する必要がある。なお、2018年度も掲載したかったが、前期は回答者が２名、後期は１名であり、記入した個人が特定される懸念があるため掲載を差し控える。

2019年度前期 時間割別「授業評価」

履修者数	7
有効解答数	7
回答率	100.0%

科目名　初等教育ゼミナールⅠI
コマ位置　土曜日・1時限
教員名　渡邊　言美

回答番号	評定平均	評定平均（全体）
Q1	3.00	2.16
Q2	4.00	3.58
Q3	4.00	3.74
Q4	4.00	3.68
Q5	4.00	3.67
Q6	4.00	3.65
Q7	4.00	3.67
Q8	4.00	3.69



参加者７名がおおむね高評価をつけていたことに安堵した。Ｑ１のみ、学習時間に課題があることが判明した。ほぼ毎週課題を課しているが、時間にばらつきがある。

（参考）2019年版授業評価アンケート

【問.１】あなたはこの授業の予習・復習・課題提出などをどれくらいしましたか。週平均時間で答えてください。

④ 3時間以上　③ 1時間～3時間　② 1時間以内　① していない

【問.２】あなたはこの授業に対して関係のないスマホ操作や私語をせず、主体的かつ熱心に取り組んだと思いますか。

④ そう思う　③ どちらかといえばそう思う　② あまりそう思わない　① そうは思わない

【問.３】授業内容は、教員が示す授業計画（シラバスなど）に沿って行われましたか。

④ 行われた　③ ある程度行われた　② あまり行われなかった　① 行われなかった

【問.４】教材（印刷資料・板書・視聴覚資料・ｅラーニング・課題など）は、有効かつ適切だったと思いますか。

④ そう思う　③ どちらかといえばそう思う　② あまりそう思わない　① そうは思わない

【問.５】授業の手法・進め方は、有効かつ適切だったと思いますか。

④ そう思う　③ どちらかといえばそう思う　② あまりそう思わない　① そうは思わない

【問.６】授業内容に興味や関心を持つことができ、理解できるものでしたか。

④ そう思う　③ どちらかといえばそう思う　② あまりそう思わない　① そうは思わない

【問.７】この授業を受講したことで、授業内容に関する知識や技能などが向上したと思いますか。

④ そう思う　③ どちらかといえばそう思う　② あまりそう思わない　① そうは思わない

【問.８】この授業を通して、上記の問3～7を含めて総合的にどのように評価しますか。

④ 良い　③ どちらかといえば良い　② どちらかといえば悪い　① 悪い

おおむねゼミ生は、例年真摯に取り組んでくれており、卒業後も学生間のつながりが継続していることをいろいろな機会に実感することができている。異学年交流も盛んであることが本ゼミの特色と言えるだろう。

かれらは3年次から4年次にかけて進路決定、各種実習（介護等体験、小学校・特別支援学校教育実習、保育所実習、施設実習、幼稚園実習）、各種採用試験対策、就職活動と息つく暇も無い時間を過ごす中で、2年間のゼミナール参加と卒業論文準備作成に携わることになる。時間の有効活用方策も重要である。

Ⅳ　課題と今後の工夫

①書籍の紹介

学生がなかなか自分から本を読まない、本を読む学生と読まない学生に二極化しているという課題が9年の実践の中で見つかった。2019年度より、毎回のゼミを利用して読んでほしい書籍を紹介している。直接授業や研究テーマにつながらないかもしれない書籍にどう誘うかが課題である。本学図書館では様々な興味深いイベントや学生ボランティアによる取り組みが実施されているが、まずは図書館に足を運んでもらわなければ効果は見込めない。ゼミ時間内でもイベント参加の案内等、働きかけをしていく必要性を感じている。

②学生同士の討論

少人数制であることの欠点に、どうしても特定の学生に発言が集中してしまうことがある。自分の意見を批判や評価を恐れず表出することに抵抗があると思われる学生もこれまで存在した。なかなか意見が出せず、レジュメ作成しても「・・だと感じる」等、はっきり意見を表出しない記載が多いことが課題である。批判的思考力という概念そのものに関する抵抗感[6]もみられることがある。また「自分の意見に自信が無く、自分と異なる意見が出ること自体、自分自身を否定されたように感じる」という声を聞いたこともある。今後も研究的態度を身につけるための手法であることを説明し、学生に十分な働きかけや工夫をなすことが重要となる。本論で照会した文献を中心に参照し、様々な思考ゲームやディベート的な討論プログラムを試行したい。

③先行ゼミナール実践からの学び

多数の先行実践があるが、本ゼミでの実践に取り入れられそうな実践を抽出して紹介する。

・足立清人（2018）「2016年度　小学6年生を対象にした「『法教育』授業企画の報告」『北星論集』（経）第58巻第1号

この論文は、論者のゼミ学生による「法（私法）教育」授業企画の実践報告である。「学生たちが小学生に教えていくためには、「私的自由の原則」とは何かを調べ、考えなければならない。その課程で学生たちが私法の諸原則・諸理念・諸価値を内面化できること、学生にとってもアクティブ・ラーニングとなることを狙った」。とする。

実際に小学校等で専門内容を授業する経験は初等教育学科学生の場合授業研究とな

るのが一般的であると思われる。本ゼミで児童への思考力育成プログラム作成の企画実践を通して、学生自身の思考力や企画力を高める取り組みを行うことができればと考えている。

・青木圭介（2016）「ゼミ教育の実践的手法に関する一考察」『長崎県立大学経済学部論集』第49巻４号

この論文はPBL（プロジェクト体験型学習、問題解決型学習）に基づく実践的手法を用いた教育効果について考察している。青木はゼミ教育を通じて学生に獲得してほしいもの、ゼミ教育の目的について（1）目的意識を有した学生生活の実現（2）コミュニケーション能力の向上（3）社会人基礎力の育成（4）満足のいく就職活動（5）早期離職の防止　の５点をあげる。他大学との合同ゼミを実施して、プレゼンを携えて国会議員を訪ね、主張を聞いてもらって議論するという企画を行い、ゼミ合宿では個人発表と学外ディベート大会準備を実施、またその準備を元に学外ディベート大会に参加するといった企画実践が行われている。教員は学生たちが自らの考えで実行しようという意思を持ち、行動し、協力しながら進めていくことをサポートする。

社会人基礎力向上という視点からも、合同ゼミナールによる多彩な企画は有効であると思われる。ぜひ検討したい。

・加藤聡一（2017）「教育課程における〈ゼミナール〉〈卒業論文〉の位置と実際の指導：書くことと生きることの区別と連関」名古屋芸術大学教職センター『教職センター紀要』（5）

この論文は卒業論文の実際の指導の概要をまとめながら、「生きること」の連続性の中で位置づけを考えたものである。テーマに関しては、「ほんとうに調べたいこと」をさがすようにして、いかにも保育・教育というものでなくてもよいと指導したり、講義は、答えを覚えるのでなく、何を問うのか、問題を学ぶ位置と意義があり、卒論のテーマをさがす「ショーウインドー」であることを指摘したという。普段の大学生活や講義といった様々な場面からテーマ発見ができるよう働きかけたい。

・山本悟（2015）「小学校教員養成課程における「卒業研究」作成に関する考察：体育科教育主体のゼミナールにおける実践事例を中心に」十文字学園女子大学人間生活学部児童幼児教育学科児童教育専攻『児童教育実践研究』8（1）

この論文は小学校教員養成課程の体育科ゼミナールでの卒業論文５年分の傾向から、今後の卒業研究の方向性および論文作成指導の基本方針について検討したものである。「研究の基本的な進め方や手だてを再考して、ゼミ内の卒業研究作成の条件やルールの見直しを図る必要がある」ことや、アンケート作成の正しい手続き（質問紙法）に関する参考書籍の紹介、その結果を数値化し分析に関わる統計学の基礎知識を学ばせる授業を展開すべき」であると主張する。

そのまま教員養成系学部での卒業研究指導に共通する指摘であると思われる。近年、成績評価（ゼミナールや卒業論文も含む）の厳格化が進められる昨今、何らかの基準

やルール作りは必要になっている。コピペの増加、先行研究の十分な調査や検証のないままネット上の発言をそのまま使用するような傾向が強まることのないよう願う。指導教員個人のみならず、大学や学部学科単位での対応が必要な状況になっているように思う。

最後に、坂井雅子の主張を紹介して稿を閉じたい[7]。坂井は日本でクリティカル・シンキング教育を推進するための具体的な方向性を３点提示した。その３点目、「クリティカル・シンキング教育を行うための教員養成教育・現職教育」である。無論教員志望学生にとって学習指導のスキルの習得は必要であるが、「教師自らが探求者でなければ、学習者を探求者として教育することはできない」ことを肝に銘じ、「時間をかけた対話を通して、探求し続けることの意義を認識する学習体験」をゼミナールで積めるようにしていきたいと考える。

---

[1]「批判的思考」の定義は、楠見によれば「第１に、証拠に基づく論理的で偏りのない思考である。第２に、自分の思考過程を意識的に吟味する省察的（リフレクティブ）で熟慮的思考である。そして、第３に、より良い思考を行うために目標や文脈に応じて実行される目標指向的な思考である」（楠見孝（2013）「良き市民のための批判的思考」『心理学ワールド』(61), pp.5-８。

[2] 中央教育審議会　初等中等教育分科会第100回配付資料（2015年９月14日）「資料１　教育課程企画特別部会　論点整理」の「新しい学習指導要領等が目指す姿」。

[3] 楠見孝・道田泰司編（2016）『批判的思考と市民リテラシー－教育、メディア、社会を変える21世紀型スキル－』誠信書房　など。

[4] 楠見孝・子安増生・道田泰司編（2011）『批判的思考力を育む－学士力と社会人基礎力の基盤形成－』有斐閣など。

[5] 特別支援教員免許課程は2018年度入学生まで教育心理学科で開講、中等教育免許課程で授業。2019年度生より初等教育学科で開講。

[6] たとえば上記註３ではクリティカルシンキングに関するネガティブなイメージについて示されている（pp.45-60）。

[7] 坂井雅子（2017『クリティカル・シンキング教育―探求型の思考力と態度を育む―』早稲田大学出版部、pp.280-282。